

# 離島の極小規模校におけるICTを利用した 国際交流授業の実践とその効果に関する研究

A Study on Educational Practice and the Effect of the International Exchange Lesson  
Using ICT at a Small-Scale School in an Isolated Island

鵜狩 歌織\*・辻 慎一郎\*・園屋 高志\*\*  
UKARI Kaori・TUJI Shinitirou・SONOYA Takashi

キーワード：国際交流授業、ICT利用、英語教育、総合的な学習の時間、情報教育

## 1章 ICTを利用した交流学习の意義

筆者の所属する三島小中学校は、鹿児島市内から航路距離で南へ約100kmの海上に位置する三島村硫黄島にある。児童生徒数は、小学校が9名、中学校が8名の極小規模校である。本研究はこのような離島の極小規模校において、コンピュータ、インターネット、テレビ会議システムなどのICT(Information and Communication Technology)を利用した国際交流授業を実践し、その効果を明らかにすることを目的としている。

その詳細は次章以降に述べるが、ここではまず、ICTを利用した交流学习の意義について筆者らの考えを述べる。

周知のように学校へのコンピュータやインターネットの導入が進み、文部科学省の調査(2003年3月31日現在)によれば、全国の公立学校のインターネット接続率は99.5%で、ほぼ全部の学校でインターネットに接続できる状況になっている<sup>1)</sup>。

また、2005年度末を目標に、普通教室に2台のコンピュータ(教師用と児童生徒用に各1台)を導入してインターネットに接続し、それをプロジェクタにつないで提示できるようにする計画(ミレニアムプロジェクト「教育の情報化」)も進行中である。

そのねらいは、「わかる授業の実現」と「情報活用能力の育成」にある。前者は、主に教科の学習の中でコンピュータやインターネットを利用し

て児童生徒の理解を助け、授業の目標を達成することである。一方後者は、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」<sup>2)</sup>である情報活用能力を育てることである。具体的には、教科の学習の中で情報活用の場面を作り、教科の目標達成と併せて情報活用能力を育てたり、総合的な学習の時間において課題解決の中で情報活用能力を習得させたりすることが行われている。

現在このような状況の中でコンピュータやインターネットを利用した学習が行われているが、その中でも最近特にインターネットやテレビ会議システムなどを利用して他校の児童生徒と交流することがしばしば行われている<sup>3)</sup>。

その意義としてここでは2点を挙げる。

第一は、社会的構成主義の学習観によっている。すなわち、「自己と他者という相互依存の関係性に依拠しながら、互いのコミュニケーションにより、知は協力活動や合意のもとに共有化され、意味ある社会的・公的な知として構成されるという展望が導かれるとする。」<sup>4)</sup>ものである。これによれば児童生徒が教室内、学校内だけでの関わりだけでなく、学校外とのつながりによって学んでいくと考え、そのつながりの手段として、インターネットやテレビ会議システムが活用されるわけである。

第二は、交流することが情報活用能力、特に情報発信能力やコミュニケーション能力の育成に役立つことである。筆者は一連の情報活用の過程を図1のように考えている。

\* 鹿児島県三島村立三島小中学校

\*\*鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター

## 2章 三島小中学校における国際交流授業の研究目的

### 2-1 三島小中学校のICTの活用

三島小中学校（以下「本校」）でのICTを活用した授業は、大別すると次の2つに分類できる。これらはそれぞれ、前章で述べた「わかる授業の実現」と「情報活用能力の育成」に対応している。

#### (1) デジタルコンテンツを用いた学力向上を目指す学習

具体的には、社会科でインターネットのWebサイト（以下「Web」）を検索して、データを収集し、まとめて発表する活動である。あるいは、数学でWeb上のドリルのページを用い、児童・生徒のスキルを高める学習を行っている。

#### (2) コミュニケーション能力を高めるための学習

本校は交通の便の不便な離島にあるために、ICTを用いて、居ながらにして全国や外国とつながっていきけるのはたいそう大きなメリットであり、コミュニケーション能力を高める学習に活用できる。

本研究では、上記(2)を対象としているが、特に、英語科と総合的な学習の時間における、ICTを使った外国との交流授業について述べることにする。

### 2-2 研究の目的

本校では、10年ほど前から、ジャンベ（あるいはジンベ）というアフリカの太鼓の演奏に取り組んでいる。毎年、その指導でベルギー在住のママディケイタさんが来島され、子どもたちと、実際に会っての国際交流を行ってきた。その過程で1998年度にはアフリカの西ギニアまで4名の生徒を派遣した。また、2001年度には16名の生徒がドイツに派遣され、アフリカの方々とのジョイントコンサートを行っている。このように、もともと国際交流には熱心であった。

しかし、このような直接会っての交流は、予算等の関係で簡単にはできない場合がほとんどである。外国との交流は、様々な教科、総合的な学習の時間で活用場面が多いし、国際化社会を生き抜く人材の育成という視点からも、もっと手軽にで

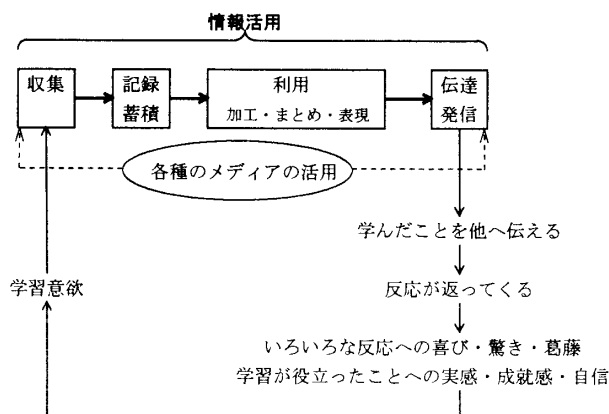


図1：情報活用の過程

すなわち、情報活用とは、情報の収集、記録・蓄積、活用、発信の一連の活動を行うことであり、それを行う力が情報活用能力である。その中でも特に発信することが大切である。発信することによってそれへの反応が返ってきて、児童生徒は喜び、成就感を感じて、さらに次の情報活用への意欲が出てくるからである。そして反応に対して再び自分たちの考えを発信する、またそれに対して反応がくる、この繰り返しによって相手とのコミュニケーションが生まれ、コミュニケーション能力を培うことになる。

さて、このような発信、コミュニケーションのメディアとしては、E-mail、Web ページ（ホームページ）、テレビ会議システムなどがある。これらのメディアについてはそれぞれに特徴があるが、そのことは既に種々の文献<sup>5)</sup>に述べられているとおりである。

本研究では、上述の3つのメディアを用いているが、特にテレビ会議システムは、E-mailやWebページと違ってリアルタイムで離れた学校と交流できる点が特徴であり、それを主なメディアとして交流学習を進めることにした。

三島小中学校では、テレビ会議システムを用いた交流学習は、国内の学校とも行っているが、本研究では外国との交流を行う授業、すなわち国際交流授業を行いその効果を調べることにしたものである。以下にその詳細を述べる。

きることも大切である。

そこで本校ではICTの活用に注目することにし、交流学习にテレビ会議システム（以下「TV会議」）、E-mail、Webなどを用いるとよいのではないかと考え、授業を実践して効果を調べることにした。

ところで、本研究では、英語科と総合的な学習の時間における交流学习を対象としたが、それは次のような理由によっている。

中学校学習指導要領<sup>6)</sup>によれば、外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」とされている。これは情報教育の三つの目標<sup>7)</sup>、すなわち「①情報活用の実践力」「②情報の科学的理解」「③情報社会に参画する態度」のうち、主に①の育成にかかわりを持っていることを示している。これはまた、「国語と同様、言語情報に関わる教科という観点から、外国語を聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの実践的コミュニケーション能力を養うことは、情報活用能力、とりわけ情報活用の実践力を養う基本である。」<sup>8)</sup>と、「新・情報教育に関する手引」の中で指摘されている通りである。すなわち、外国語科では教科の目標達成と共に、情報活用能力の育成にもかなり関わっていることになるわけである。そこで、本校では、英語科での交流学习を計画し、外国の学校と交流する授業、すなわち国際交流授業を行うことにしたものである。

一方、総合的な学習の時間については、そのねらいは、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」（中学校学習指導要領<sup>6)</sup>）とされている。すなわち、目標そのものとして、問題解決能力や学び方などがあり、これに情報活用能力が深く関わっていることはいうまでもない。

このようなことから本校では英語科と総合的な

学習の時間を研究対象としたしだいである。

本研究は、このような国際交流授業を設計、実践、評価してICT利用の効果や意義を明らかにすることを目的としている。

### 2-3 本研究で予想されるICT利用の効果

上述のような意図で研究を進めることにしたが、国際交流授業により、次のような効果があるのではないかと考えた。

#### (1) 英語科

- ① 外国と実際につながることで、児童・生徒の興味・関心を高めることができる。
- ② 実際の相手に伝えることで、自分の言葉で思いを伝えようとする意欲を高めることができる。
- ③ TV会議では外国人との交流が自然な場面設定でき、顔を見て話ができる。
- ④ 特にTV会議ではすぐに反応が分かるので、生きたコミュニケーション能力を身につけられる。
- ⑤ 生徒の表現に対して反応や応答があると、達成感を得ることができると同時に、相手とのやり取りを通して自然に英語の表現を身につけることができる。

#### (2) 総合的な学習の時間

本校の総合的な学習の時間では、数年にわたって故郷硫黄島について調査し、まとめることを行ってきた。国際交流の第1歩は、まず足下からとはよく言われることである。そこで、この郷土学習の成果を、外国との交流につなげることで、さらにグローバルな視点を育てることができると考え、外国との交流に取り組んだ。次のような効果が予想された。

- ① 郷土学習の成果を外国との交流で深め、広げることができる。
- ② 表現方法として、E-mail、Web、TV会議を使うことで、自らのコミュニケーション能力を育てられる。
- ③ 交流を通して、ICT活用能力が身につく、情報活用能力がバランスよく身につく。
- ④ 外国との交流は生徒の興味関心が高く、積極的な学習態度を引き出せる。

- ⑤ TV会議は特にリアルタイムで、交流ができるので、お互いの意見を調整しながらものごとを進めていく協働の感覚が身につく。

上述のことを研究目的として取り組んだ授業の実践について、以下に相手国別に章を変えて述べることにする。

### 3章 授業の実践(1) ～オーストラリアとの交流～

#### 3-1 最初の交流～ジャンベと歌の交流(2002年)

##### (1) 実践のねらい

この交流は総合的な学習の時間に行い、TV会議を利用した。小学生、中学生合同の交流である。初めて外国と交流するというところで、とにかく楽しもう！ということを取り組み始めた。小中合同ということもあり、英会話をあまり必要としない音楽を中心とした交流を設定した。ねらいは「外国の子どもたちとふれあうことで、積極的に外国と交流していこうとする態度を育てる。」ことであつた。

##### (2) 授業の実践と児童生徒のやりとり

授業の実践を表1に示す。

この授業の中で交わされた、児童生徒のお互いの質問のうち代表的なものを以下にまとめる。

- 1) 日本から
  - ・制服の色の違いは何？
  - ・季節は何？ ・今何時？
- 2) オーストラリアから
  - ・店が何件ぐらいあるの？
  - ・火山は怖くない？
  - ・日本の春はどんな感じ？

自分たちにとって当たり前のことを相手から質問され答える活動の中で、自らの住む地域についての理解がより深まった。また、一方、遠く離れたオーストラリアをリアルタイムの交流の中で実感として感じたようだ。

##### (3) 児童生徒の感想や疑問

本授業終了後、児童・生徒に自己評価カードを記入させたが、その中から感想をいくつか紹介する。

- ・英語力がないなあと思った。(中学生)
- ・オーストラリアには白人が多いなあ。(中学生)
- ・初めての外国との交流で楽しかった。(小学生、中学生)
- ・オーストラリアの人が拜んでいた。なぜだろう？(小学生)

表1：オーストラリアとの交流授業（1回目）

時間	児童生徒の活動	
	三島小中学校	オーストラリア Lakes Entrance Primary school
23分	はじめのあいさつ 1. ジャンベ演奏 2. 自己紹介 3. 硫黄島の紹介 4. ジャンベ演奏・説明 (一緒にダンス)	三島の演奏を聞き、ダンスを一緒に踊る
25分	日本語版 “Old McDonald’s had a farm” 合唱	5. 自己紹介 6. 学校・地域紹介 7. 英語の歌（2曲）
	2校一緒に英語の歌を合唱	
	質問タイム	質問タイム
2分	終わりのあいさつ	

- ・英語が話せなくてしゃべりたいことが言えなかったからもっと英語を勉強したい。(小学生)
- ・時差や季節、言語その他私たちと異なることはたくさんあったけど、硫黄島と似ているところもたくさんあったのですごいと思った。

(4) 授業の成果と課題

ICTによる国際交流は子どもたちにとっても、我々教師にとっても初めての経験だったが、やってみると多くの成果を得た。また、課題もいくつかでてきた。

1) 成果

- ① 外国の人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった。
- ② 言葉よりも積極的に交流しようという意欲が大切だということに気づいた。
- ③ 外国との交流というと特別なものというイメージが強く、前に踏み出せないところがあったが、気軽にできるものだということがわかった。

2) 課題

準備不足と児童・生徒の英語力不足から教師の活動が多く、子どもたちの活動の場が少なかったので、それをもっと設定した方がよい。

3-2 2回目の交流～アボリジニとの文化比較 (2002年)

(1) 実践のねらい

1回目の交流は音楽を中心にしたものだったが、今回は中学生だけでより深まりのある文化交流をしたいと考え、前回と同じ学校をお願いしたところ、アボリジニの子どもたちとの交流が実現した。中学生は普通の英語学習の成果をためすよい機会でもある。今回の授業のねらいは次の2つである。

- ・日本とオーストラリアの文化を知り異文化に対する理解を深める。
- ・外国語に興味を持つとともに、積極的に自分の考えを英語で表現しようとする意欲を持つ。

(2) 授業の実際

授業の概要は表2の通りである。

(3) 生徒の感想

2回目のTV会議を終えての生徒の感想は以下の通りである。

- ・意見は言えなかったが質問することができてよかった。
- ・本物の英語を聞いて動揺した。
- ・すごく恥ずかしかった。
- ・意味のわからない単語が出てきてわからなかったけど楽しかった。
- ・硫黄島に伝統文化があるように、オーストラ

表2：オーストラリアとの交流授業（2回目）

時間	生徒の活動	
	三島（日本）	Lakes Entrance（オーストラリア）
10分 20分	始めのあいさつ 1. 自己紹介 オーストラリアの発表を聞く 3. 質疑応答	自己紹介 2. オーストラリアの文化について ～アボリジニの文化～
15分	4. 日本（硫黄島）の文化について 5. 質疑応答	
5分	6. 意見交換 終わりのあいさつ	

リアにも伝統文化がある。

- ・日本の旗のことを聞かれて答えられなかった  
のでそのようなことも知っておきたい。

#### (4) 授業の成果と課題

この授業を終えての成果と課題は以下の通りである。

##### 1) 成果

- ① 自分の考えを相手に伝えたり、相手の英語を理解したりすることができ満足感があつた。
- ② お互いの文化を意識し、日本人の文化を再確認できた。
- ③ 積極的になれば言葉に関係なくある程度のコミュニケーションは図れるということに気づいた。

##### 2) 課題

今回はTV会議だけの交流であったが、それだけではなく、その前後に E-mail などを使った交流を入れると、よりTV会議の交流が充実するのではないかと考えられる。

## 4章 授業の実践(2) ～イスラエルとの交流～(2003年)

### 4-1 実践までの経緯

国際交流授業をアレンジするJEARN<sup>9)</sup>のメーリングリストにイスラエルの高校が日本の学校との交流を希望しているという情報が流れた。「英語による相互文化紹介の活動を通して、世界の人々とお互い理解し交流していこうとするコミュニケーション能力を育成したい」と考える本校は、すぐに交流したいとの希望をJEARNに伝えた。

過去2回の交流の経験を元に、イスラエルとの交流を総合的な学習の時間と英語科で計画的に授業を進めていくこととした。また、過去2回の課題を踏まえ、TV会議授業の前のE-mail等での交流を充実させることとなった。

なお、このイスラエルとの交流授業では、E-mail や Web を使った学習を行い、TV会議授業を行う計画であったが、後述するように、イラク戦争の影響でTV会議授業はできなかつた。しかし、結果的には生徒が国際情勢を肌で感じることができ、世界を実感として味わうことができたの

で、当初とは別の成果があつたと言える。

### 4-2 授業前の実態調査結果

#### (1) 実態調査及び結果

今回は生徒に対して事前に調査を行い、交流に役立てることとした。調査内容は、①イスラエルについての知識、②日本のことで伝えたいこと、③TV会議授業について、④英語によるコミュニケーションについてなどである。

①については、概ね次のような結果であつた。

イスラエルは名前は聞いたことがあるが、位置や首都はわからない国である。またイメージについても、日本とのつきあいはそう深くなく、スポーツも盛んとは言えないと感じているなど、子どもたちにとってなじみの深い国とは言えない。

②としては、次のような項目が挙げられた。

- ・日本の伝統芸能、文化
- ・日本の面積、環境
- ・どんな伝統芸能があるか
- ・日本の楽器にはどのようなものがあるか
- ・日本はどの位置にあるか
- ・日本で今さかんなスポーツはなにか
- ・日本の伝統文化、行事、工芸品など
- ・日本のスポーツ ・日本の料理
- ・日本の伝統行事 ・日本の都道府県数
- ・日本の四季の特徴 ・日本の政治状況
- ・サッカー
- ・日本の昔ながらの伝統（絵、茶道、やきもの、かぶきなど） ・日本の首相
- ・文化（世界的に有名な） ・島国
- ・戦争～現在に至るまで

このように、日本の文化や地理的なことなど、多くのものが出された。すなわち、これらを紹介することで、自らの足下を見つめることになり、生徒のアイデンティティを育てるのに役立つと考えた。そのためにも、何をどう紹介していくのかを生徒に考えさせていくようにした。

さらに、相互の理解は、1時間のTV会議の交流授業だけで深めることは難しいと考え、E-mail等を使つての事前の交流を充実させていくことにした。

次に、上述の③と④の調査結果を述べる。

調査対象は、中学1年生4名（女子1名）、2年生2名（女子1名）、3年生1名、計7名である。

1) 外国とのTV会議授業について

Q1 あなたは外国とのTV会議授業に参加することが好きですか？

- ア 好き（1名） イ 苦手（2名）  
ウ どちらともいえない（4名）

Q2 前問で「ア 好き」と答えた方におたずねします。

その理由は何ですか？ 次の中からあてはまるものにいくつでもよいので、○を付けてください。

- ア テレビ会議は遠くにいる人と、画面を通じて話ができ便利だから。（1名）  
イ 外国の様子を知ることができるから。（1名）  
ウ 外国とリアルタイムに、しかも顔を見ながら話せるから。（1名）  
エ 英語を実際に試せるから（1名）  
オ その他（自分たちにしかできないもの、得した気分になる。）

Q3 Q1で「イ 苦手」と答えた人に聞きます。その理由は何ですか？ 簡単に書きなさい。

- 苦手な理由……緊張して話づらい。外国の言葉が苦手だから。  
○ どちらともいえない理由……相手の国がよくわかっていいんだけど、うまくしゃべることができない。

Q4 国内のTV会議授業と外国とのTV会議授業についてあなたは以下のどれですか？

- ア 国内のTV会議授業の方が楽しい。（2名）  
イ 外国とのTV会議授業の方が楽しい。（2名）  
ウ どちらも楽しい。（1名）  
エ どちらも楽しくない。（2名）

2) 外国とのTV会議授業での英語について

Q1 あなたはTV会議授業で英語を使って見知らぬ国の人とコミュニケーションをとることは以下のうちどれにあたりますか。

ア とても楽しい（1名）

イ 少し楽しい（0）

ウ 少し苦手（2名）

オ とても苦手（4名）

Q2 TV会議授業を受けることはあなたの英語力アップに役立つと思いますか。

- ア とても思う（1名）  
イ 少し思う（6名）  
ウ 少し思わない（0）  
オ とても思わない（0）

Q3 実際に会って外国の人と話すのとTV会議を通して話すのではどちらが取り組みやすいですか？

- ア TV会議（1名）  
イ 実際に会って（3名）  
ウ どちらも同じくらい取り組みやすい（0）  
エ どちらも取り組みにくい。（3名）

Q4 外国とのTV会議授業で、英語ではなく、日本語中心でコミュニケーションをとることができればあなたはもっと意見を言えると思いますか？

- ア 思う（6名）  
イ 思わない（1名）

このように、外国とのTV会議による交流は予想より苦手という反応が多かった。2)の「英語について」と合わせて考えると、やはり英語の壁が大きく、自分の思ったことをうまく伝えられないことが、生徒の意欲をそいでいるように思える。

一方で、こういう活動を繰り返すことで、生徒のコミュニケーション能力が高まっていくと予想される。そこで、Web上の翻訳サイトの利用など、生徒のコミュニケーション能力をICTなどで援助していく学習活動をとりたいと考えた。

#### 4-3 授業の計画と実際

(1) 相手校：Rabin Comprehensive High School in Beer-Sheva, Israel

(2) 授業の設計

先にも少し述べたが、本校では、総合的な学習の時間を通して、ふるさと硫黄島について学習を深めており、プレゼンテーションを通して、その

成果発表を行ってきた。従って、硫黄島については理解がかなり進んでいると思われる。一方で、大きな視点から「日本の中の硫黄島」、また「鹿兒島の中の硫黄島」という視点から硫黄島を見つめさせる活動を行わせることも有益であろうと考える。

今回、イスラエルとのTV会議で、イスラエルの文化、日本の文化という視点でお互いに紹介する活動の中で、日本の中の硫黄島を意識することが可能と考える。現代の国際化社会を生き抜く生徒たちには、周知の間での「会話力」にとどまらず、未知の相手を認めながら、お互いに議論できる「対話力」を育てることが大切である。

今回の相手校である、Rabin Comprehensive High School の子どもたちは、ヘブライ語を母国語としており、英語を母国語とする前回のオーストラリアの子どもたちとの交流とはまた異なる条件での交流となる。

### (3) 交流授業の目標

- ・お互いの文化を紹介する活動を通して、世界の人々とお互いを認め合い交流していくコミュニケーション能力を育成する。
- ・世界中の10代の子どもたちと交流することでその違いや共通点を理解させる。

### (4) 指導目標

- 1) イスラエルの国や、文化について簡単に説明できるようにする。
- 2) 日本の文化について簡単に説明できるようにする。
- 3) 日本の中の硫黄島・世界の中の硫黄島という視点で硫黄島を見つめることができるようにする。
- 4) 英語を用いて自分の意見を述べるができるようにする。
- 5) マルチメディア等を用いて、相手にわかりやすい資料を提供できるようにする。
- 6) 初めての相手とコミュニケーションを積極的にとろうとする姿勢を育てる。
- 7) 年間の国際理解学習を通して学んだことや課題を意見交換し、世界の中での自分(アイデンティティ)の確立への一助とさせる。

### (5) 学習計画 (全7時間)

- 1) イスラエルの概要を知ろう (1時間)
- 2) 日本の文化を見つめてみよう (1時間)
- 3) プレゼンテーション原稿を英語で作ってみよう (3時間)
- 4) イスラエルとTV会議をしてみよう (1時間)
- 5) イスラエルとの交流から学んだことをまとめてみよう。(1時間)
- (6) 事前テストの実施

TV会議利用の授業では、相互の機器の調整や授業づくりについての意見を相互に交換することが不可欠である。今回の授業でも事前テストを行い教師間の交流をまず行った。

その後に次のように実際に授業に取り組んだ。節を改めて述べる。

## 4-4 総合的な学習「TV会議授業～イスラエルとの交流～」及び英語の時間での交流

### (1) 総合的な学習

TV会議授業を行う前に、イスラエルとはどういう国かということ Web 等を使って相互に調べ、発表し合う活動を通して、イスラエルという国の概要を把握させるために以下の授業を行った。

- 1) 指導目標：Web 等の資料をもとに発表活動をすることで、イスラエルの概要を説明できる。
- 2) 本時の実際 (1/7)：表3に示す。
- 3) 評価：Web 等の資料をもとにイスラエルの概要を説明することができたか。
- 4) 授業を終えての生徒の感想

授業後、生徒は次のような感想を述べていた。

- ・今日の学習によってイスラエルの国のいろいろなことがわかったのですが、調べれば調べるほど、まだいろいろなことがわかりそうなので、もっともっと調べていきたいです。
- ・今日は国名を聞いたことくらいしかなかったイスラエルを調べて、初めに思っていたこととは全く違うことがわかってよかった。

### (2) 英語の時間での交流

TV会議での交流を前に、相互理解のために、E-mail や Web を用いての交流が3時間にわたり



行われた。この授業は、英語科の中で実施した。

このような英語を使った交流を通して、生徒達は以下の感想を述べている。

- ・イスラエルでもドラゴンボールをやっているびっくりした。
- ・イスラエルの学校は、日本と違って早く終わっていいなあと思った。
- ・イスラエルの子どもたちの趣味とかみても、

僕たちとあんまり変わらなくておもしろかった。

(3) 授業の経過（イラク戦争の影響によるTV会議授業の中止）

このように、イスラエルとの交流は大変計画的に、また順調に進んでいた。イスラエルの担当教師からのメールもほぼ毎日届き、6時間の時差を越えて交流が深まっていった。ところが、突然E

表3：イスラエルとの交流授業の最初の時間（1／7）

過程	主な学習活動	時間	教師の支援・準備
導入	1 はじめのあいさつ	5分	○学習カード
	2 イスラエルとのTV会議についてのスケジュールを聞く。		○スケジュールを知らせることで学習に見通しを持たせたい。
	3 イスラエルに関するアンケート調査の結果を知る。		○アンケート結果を知らせることで意欲を高めさせたい。
展開	4 学習目標を理解する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;">イスラエルはどんな国だろうか？</div>	40分	○資料としては以下のものを準備する。 ・イスラエル観光局のWeb（今回は印刷物） ・ワールドアトラス ・地図帳 ・地球儀
	5 資料をもとにして、イスラエルを紹介する発表原稿を作成する。		○ポストイットの活用
	6 発表原稿を元に、各自でリハーサルをする。		○文章のみの発表を行わせる。 ○時間内にスピーディーに行う。 ○歴史的な背景について補説したい。
	7 「イスラエル紹介」を発表する。 ・発表各自2分以内 ・質問2分以内		
終末	8 イスラエルについての先生の説明を聞く。	5分	
	9 イスラエルについてのまとめをする。		・自己評価カードにまとめさせたい。
	10 次時の予告を聞く。		・相手に日本文化を紹介することを知らせ、意識づけを行う。
	11 終わりのあいさつ		

-mail が届かなくなり、音信不通になってしまった。本校から、何度もメールを送ったが、なかなか返事が届かず。授業も停滞してしまった。そんな中、以下のメールが届いた。

Dear Kaori,

My students and I are ok but the general atmosphere and mood are down. We're expecting with great fear/hope the American attack.

Unfortunately I don't think that we'll be able to arrange a tv conf. by the end of March.

Let's pray for peace

Yonit

すなわち、イラク戦争の影響で、イスラエルの学校が外国との国際交流授業を行える余裕がないというのである。このメールには、本校の教師、生徒とも衝撃を受けた。新聞やテレビで、そのような国際情勢にあることは、筆者も含めて知っていたのだが、その影響がこのような形で出るとは思いもしなかったというのが実感である。

早速、このメールは授業で採り上げた。そして、生徒は「War someday end. We all wish for world peace. Everybody seeks happiness.」などのメッセージをイスラエルに送信した。

その後、イラク戦争の終結に伴い、交流の再開を模索して現在に至っている状況である。

#### (4) 学習の成果と課題

この学習では次のような成果があったと考えられる。

- ① TV会議を目標として、その前に Web や E-mail で学習することで、相互の理解が深まった。
- ② 英語に訳す等の語学中心の学習は英語で、総合的な学習はそれ以外のものをという授業計画が効果的だった。
- ③ 国際情勢を肌で感じることができ、生徒も世界を実感として味わえた。

結局、この学習ではTV会議ができなかったわけであるが、逆に計画通りに行かなかったことで、③のように得るものもあった。

## 5章 授業の実践(3) ~イングランドとの交流~ (2003年)

### 5-1 実践のねらい

小学校では総合的な学習の中で英語の学習に取り組んできた。その総まとめとして、外国との交流を考えて相手校を探し、同じ小規模校であるイギリスのボルトン小学校とTV会議授業をすることになった。

授業のねらいとしては、次の2つがあげられる。

- ① 学習した英語を使って自分のことを相手に伝えると同時に、相手(外国)のことを知ることによって外国と交流することへの意欲を高めさせる。
- ② 同世代の外国の子どもたちと交流することで外国を身近に感じさせるとともにお互いの共通点や相違点に気づかせる。

### 5-2 授業の実際

表4に示したような授業を行った。

授業後、児童の感想として次のようなものがあった。

- ・じゃんけんぼんがおもしろかった。
- ・いろんな違いがおもしろかった。
- ・英語があまり分からなくておもしろくなかった。
- ・いっしょに歌を歌えてよかった。

### 5-3 授業の成果と課題

児童らは、自分たちが主体となった初めての英語によるTV会議だったため緊張していたが、交流できた喜びは大きかったようだ。

成果として

- ① 外国との違いに気づくだけでなく、音楽やゲームなど楽しさを共有できることがあることにも気づいた。
- ② 英語を学習して外国人とコミュニケーションを図ろうという意欲が高まった。

また、課題としては、子どもたちの英語力にあった授業計画づくりや、相手校とのさらに細かい打ち合わせなどが挙げられる。

表4：イングランドとの交流授業

時間	児童の活動	
	三島小学校（日本）	Bolton Primary（イングランド）
15分	2. 自己紹介 （自分のこと・家族のこと）	1. 自己紹介
15分	5. 学校・地域紹介 6. クイズ	3. 学校・地域紹介 4. 質疑応答
15分	7. ゲーム じゃんけんぽん・rock scissors paper	
5分	8. 歌 メリーさんの羊（英語） 三島小→Bolton→合同	

## 6章 研究の成果と課題

以上、ICTを使った国際交流授業の実践結果について述べた。2章3節に述べたような当初予想した効果は、概ね確かめることができたと思われる。本文中にも各授業における成果と課題を述べたが、最後にまとめて挙げておくことにする。

### (1) 成果

- ① 英語を話せるようになりたいと思う子どもが増えた。
- ② 数回のTV会議を体験し、生徒が外国を身近に感じるようになり、視野が広がりつつある。
- ③ ICTの力を借りることで、外国との交流を日常的に楽しめるようになった。
- ④ 外国の人と交流していくには、まず日本のことをよく知る必要があると気づいた。
- ⑤ 教師自身の視野の広がりにつながり、教師の英語学習熱の高まりが見られた。また、教師の他の教育活動への積極性にも寄与した。

### (2) 今後の課題

- ① 国際交流の際は、語学学習が主たる目的なのか、例えば文化交流が主なのかで、カリキュラムに工夫がいる。総合的な学習の時間では、英語の学習にならないようにしたい。
- ② 継続的な交流・発展性を持った国際交流プ

ログラムの開発が必要である。

- ③ ICTだけに偏らない交流を大切にしていきたい。例えば、手紙や実物を送り合うなどの工夫をすることで、交流がより充実したものになる。
- ④ 小学生は、英語力がかなり不足しているのので、言葉を使ったコミュニケーションは難しい。そこで、絵や写真を使うなど授業の工夫が必要である。
- ⑤ 中学生は、発達段階もあり消極的になる生徒も見受けられる。そこで、交流授業の前に、様々な場面を想定した準備をするなど、自信を持って授業に臨める工夫が必要である。
- ⑥ 小学生は言葉は理解できなくても楽しめるが、中学生は言葉を理解できないと、交流に対して非常に消極的になりがちなので、教師のサポートの在り方を研究する必要がある。

このような課題点について今後検討しながら本研究をさらに進めていきたいと考えている。

インターネットの普及に従い、TV会議は身近なメディアになってきている。本県は離島僻地が多いので、本校のような実践が広がっていくことを期待したい。

[参考文献及び注]

- 1) 文部科学省：学校における情報教育の実態等に関する調査結果、2003年7月、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm)
- 2) 臨教審だより、1986年1月臨時増刊、第一法規、p. 95
- 3) 種々の文献に報告されているが、最近ではたとえば次の文献を参照。NEW教育とコンピュータ、2003年6月号、学研、この中で、「子どもに力をつける学校間交流をしよう」(pp. 12-21) に事例が報告されている。
- 4) 菅井勝雄：コンピュータ教育の歴史的発展、「水越敏行・佐伯胖編著：変わるメディアと教育のありかた」に所収、ミネルヴァ書房、1996年5月、p. 93
- 5) たとえば、次の文献。久保田賢一・三輪勉：遠隔学習の新しい可能性とは、「水越敏行・ICTE編著：メディアとコミュニケーションの教育」に所収、日本文教出版、2002年3月、p. 156  
特にテレビ会議システムについては、次の文献に整理されている。松下文夫：情報ネットワークと総合的な学習、「山極隆監修：「総合的な学習の時間」の理論と実践」に所収、実教出版、2000年9月、pp. 75-87
- 6) 文部科学省：中学校学習指導要領、1998年12月
- 7) 情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて、情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 最終報告 1998年8月答申
- 8) 文部科学省：情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～、2002年6月、pp. 54-55
- 9) <http://www.jeam.jp/japan/>